

「施設の自然環境を地域の財産としてより豊かに、未来へ引き継いでいく」「施設の特徴を活かし、地域の方々に自然の恵みと魅力を感じていただけるように管理を行う」これら基本方針のもと、事業を行いました。春には、「地域の環境保全につとめた功績」に対して、環境大臣表彰をいただきました。

また、本年度は指定管理5年間の中間年にあたり、第三者評価が行われました。結果、大学や専門知識を有する学生、地域との連携、施設の魅力を活かした活動について、評価を得ることができました。(参照:資料p20)

いただいた評価はサポーターさんはじめ、生態園に関わる方々の支援と協力の賜物です。今後の活動継続に向けての責任として捉えることが大事と考えます。

一方、事業運営においては、難しい課題も複数あります。課題と成果併せて報告します。

### 【施設管理事業】



ササ刈り

基本方針「気持ちよく自然を感じ、安心して利用できる公園管理」のもと、管理を行いました。(資料p1-4)

施設管理事業には大きく分けて、建造物の維持管理と、自然の保全と2種があります。前者は主にスタッフが担い、後者はサポーターさんたちとスタッフが、毎月2回「自然保全作業」を中心に行います。

自然保全において、計画から実施の流れとして、①事務局スタッフがゾーンごとの植生環境と管理目標をふまえ、場所を選定し、下準備を行う。②定例作業当日、皆で低木伐採とササ刈りなどを実施 ③ ②の後に適宜、支援スタッフが伐採木や枝をチップパーにかける、薪を作るなどして活用処理を行う。④ ①～③とは別に、適宜、事務局スタッフが植生環境と管理目標をふまえ、草やササ刈りを実施。という一連の作業が定着しています。

**サポーターさん** 自然保全作業に参加するサポーターさんは、各回5～20人程度で、主力のメンバーは70代男性たちです。他に30代～60代、小学生親子、中高校生、新入の方々も少しずつ参加されていて、毎年新しい方も入られています。継続してきた広報の成果と言えます。

しかし、ベテランの経験や技術を次の代に引き継ぐためには、若い世代が定着するように、さらに根気強い働きかけを続ける必要があります。基本は、地域に向けて参加の入り口を広げ、参加者が気持ちよく安全に作業できる環境を維持することと考えられますが、事業継続のため、「参加」の呼びかけは、事業全体で考えていかなければならない大きな課題です。

**気候の変化** 近年、草木の繁茂する勢いが増しているようです。草木の生長の後を追うばかりで、追いつけないとさえ感じてしまいます。

また、秋には台風接近による強風が、高木の枝や梢を折り、幹を割るなど被害を多数もたらしました。園路に近い危険木は、横浜市が伐採処理しましたが、園路から離れた所で、梢が折れてぶら下がっている光景を、昨今、恒常的に見るようになりました。樹齢40年を超える木が多く、今後も台風襲来は気になります。

**伐採とその処理** 日照改善を目的として、東西の山でコナラ等、計9本を横浜市に依頼し伐採しました。その丸太は本年も山から搬出できていません。ほとんどの木が径30cmを超え、重量は想像以上です。造園業者は、搬出できない理由として、作業と費用バランス、危険性を挙げていました。運搬可能な丸太は、私たちの作業で山から下ろしましたが、大きなものは



丸太の山

園路際に転がして寄せるのが私の力の限度でした。今後、園内に丸太の山積みが増えていくことが懸念されます。横浜市とは引き続き、相談しながら、伐採とその処理について検討していきます。

**支援スタッフ作業** 伐採木の活用、機械整備、自然保全作業でできない高木の伐採\*など、技術を要する作業を支援スタッフは多く担います。しかし、限られた管理費予算の中で、作業時間の見直しをせざるを得ませんでした。これまで行ってきた刈りササの粉碎(チップ作業)を辞め、チップ作業は低木をかけるのみとしました。低木のチップ作業も減らし、適所に低木等の堆積場を作ることに方針を変更しました。堆積場を作ることで林床の生物環境を損ねないように注意も必要です。 \*直径 20 cm以下の高木

**植生豊かな公園づくり** 多様な植物が生息できるように保護し、植生に配慮した草・ササ刈りを行いました。植生の豊かさがほかの生きものの豊かさにつながり、生きものの賑わいを感じられる風景となります。

来園者アンケートでは、「昔ながらの田んぼにトンボが飛んでいて素晴らしかった。大切な自然を保護してくれてありがたい」(60代)「いろんな植物や生き物がいてとても楽しい」(10代)のように、生きものの多さを喜ぶ感想が多く見られました。

**安全** 夏にサポーターさん2人がスズメバチに、スタッフ1人がハチに刺される事故がありました。今後も、特にスズメバチの脅威を抑制するため、冬と春の女王バチ駆除を継続します。また人が接近しやすい場所には巣を作られないように、見通し・風通しをよくするなど、配慮した管理作業が必要です。

そのほかには事故や怪我もなく、無事に終えました。今後も「安全第一」を合言葉に、作業者は想定される危険の共有、作業における機械使用ほかルールの徹底、作業と適当な休憩等、気を緩めずに、基本を守り作業を行うことが必須です。

**課題** 保全への参加 樹木伐採とその処理

## 【自然再生事業】

### 〈植物管理〉

特に大きな問題は生じていませんが、高木の成長による日照不足、数年まえから目立ち始めた乾燥状態の継続など、気になる問題もあります。日照不足は例年同様、高木類の間伐と低木の伐採で対処するしかありません。乾燥化は非常に心配な問題で、低木類の開花時期の乱れ、開花期の短さ、結実の悪さ、またスマレ類やニンソウなどの小さな草本類の成長の悪さなどは乾燥化と関係している可能性があると思われ、今後の注意が必要です。



シロバナサクラタデ

低木、小高木については、今年度は西山を中心に手をつけましたが、十分ではありません。また例年のことですが、明るくした場所での実生株などの生育は早く、好ましい状態を継続的に維持するのはなかなか難しいものがあります。

全体的には植生環境は改善されてきていると考えられますが、今年度は心配な問題も目立ちます。良好な状態もの、不良な状態ものの代表的な事例をあげます。

#### ◇良好なもの

- ・シロバナサクラタデの増殖 ・コウヤボウキの増殖 ・フデリンドウの2か所での定着
- ・ツルニガクサ増殖 ・ウラシマソウ新株開花 ・ツルウメモドキ大量結実 ・ノササゲ新株開花

#### ◇不良なもの

- ・ニンソウの開花不良 ・ヒトリシズカ生育地の減少 ・ハコネウツギ開花不良
- ・キブシ雌株生育不良 ・クサボケ不良 ・アリアケスマレ株減少 ・カキドオシ生育不良



イチヤクソウ

ほかに、今年度だけの問題ではないものとして、イチヤクソウ、オトギリソウ、オオバトンボソウ、オケラなどの生育状況は心配な状態が続いています。

帰化種や移入種の侵入にも注意しなければなりません。オオスズメノカタビラの増殖、カゼクサの増殖、キショウブの増殖、タチイヌノフグリの増殖、ナワシログミの増殖などが気がかりな点です。キショウブやナワシログミは積極的な除去が必要ですが、今のところ大きな問題とはなっていません。

### 〈水辺管理〉

在来生物の生息環境保全に取り組みました。その活動は主に、指定管理とは別の委託を受け、水辺スタッフが生物調査、外来種駆除、アシ刈り、泥浚渫などを行っています。

3月には環境省より御手洗池の視察もありました。生態園の希少魚保全の事例を、将来的に外部へ提示できるよう、事業継続の重要性を改めて認識しました。

**水生生物保護** 御手洗池では在来種モツゴの割合が年々増加し、6割を越えました。希少種とモツゴは餌等で競合関係にあると考えられるため、動向に注意し、観察を続ける必要があります。(資料p5-8)

ニホンアカガエルの保護を2009年から続け、今冬も卵塊を約30確認しました。が、昨年に続き、幼生の減少が顕著で、捕食者等への対策が不十分と言わざるを得ません。観察と対策が必要と考えられました。

**外来種駆除** アメリカザリガニの捕獲率を上げるため、かご網などの数を増やしました。捕獲数は園全体で3510と、前年よりも1506個体多く、作業の成果か、個体数増加の為か定かでないにしても、まだ先は見えません。

また、新たな外来種として、ブルーギルとカワリヌマエビ2種が確認されました。ブルーギルは2008年に駆除根絶しているのですが、残念なことに再び、密放流された可能性があります。在来小型魚類への影響が極めて大きく、早期根絶をめざし、精力的に取り組む必要があります。今冬は粗朶による罟、春からアイカゴ、小型定置網など使い駆除作業を進めています。



ブルーギル

カワリヌマエビは在来ヌマエビの生息を脅かし、駆逐してしまう可能性が指摘されています。継続的な駆除作業を続けるしかありません。

**泥** 昨秋も、御手洗池ではかいぼりを行い、泥を田んぼに投入しました。ただ、沿岸部のみで、中央部には手を付けられていません。御手洗池園全体で、泥の堆積は大きな課題の一つで、上流のカエル池でも、この10年間の泥の堆積は驚くほどです。昨今、豪雨による土砂流下が全国的に頻発しています。生態園では泥の浚渫を普通の業務として継続していく必要があります。

本年度は2004年から継続している水質、生物調査をまとめ、経年変化を概観しました。水質に大きな変化はないものの、湧水量の減少が懸念されます。池の外来種問題、生物相の変化は前述のとおりです。

**課題** ・泥の堆積と対応 生物環境の観察継続

### 〈昆虫の観察〉

出現記録を始めて約9年、デジカメで写真に収め、それを基に種の同定作業に取り組んでいます。その結果、累積で約720種の昆虫を記録しています。市街地の真ん中に位置する緑地環境であることを考慮すると、それなりの種類の昆虫が生息していると考察されます。



ヒカゲチョウ

しかし、生態園周辺の環境は、農地の宅地化、大型マンション建設による人口



増加等、市街地化が進み、トンボやチョウ、バッタなどの昆虫の内、滅多に見られなくなった種も出始めています。(資料p10)

**課題** 専門家による生態調査・評価

### 【田んぼづくり事業】

**生きものと里山景観保全** 田んぼにはドジョウやケラ、トンボのヤゴなどが見られます。日照と水と土とが揃った谷戸の畔周りなど、生きものが多く見られます。小さい谷戸ですが、稲の生長が季節を彩り、東西の山の緑に囲まれた風景は、来園者の気持ちも和ませています。



もちつき

**楽しく元気に** 各作業をきちんとこなしながら、参加者が楽しく体験できることを大切に、事業をすすめました。リピーターも多く、本年度は9組(全23組)が先輩参加者として作業を円滑に動かしてくれました。次年度は9組の家族が引き続き参加します。初回のオリエンテーションの自己紹介で、リピーターが、「子どもがぜひと言うので」「楽しかったので、今年も！」と言う言葉にスタッフはとても励まされます。(資料 p13-15)

**小学校の体験** 下の田では茅ヶ崎小学校と茅ヶ崎東小学校5年生が米作りを行いました。育苗からもちつきまで授業に組み込んでいる小学校は、横浜ではとても稀なようです。地域の子どもの貴重な体験活動を指導、支援しました。また、次年度の先生方の参考にと、作業手引きを作成しました。

**土づくりと米の質** 肥料として、ザリガニ粉、池のかいぼりて浚渫した泥を入れ、また夏季の渇水時に池



池の水をポンプアップ

の水をポンプアップし流入しました。また、米の品種を「喜寿もち」に変えたことや、天候も影響したと思われませんが、収穫したお米は質量ともにととも良好でした。稲わらの脆いことも、長年の課題でしたが、今年はしっかりと良い稲わらになりました。刈った稲の「はさかけ」場を田んぼから、畔の上に移し、風の通るアシ原付近を選んだことも、功を奏したかもしれません。今後も、参加者や子どもたちが美味しいおもちを味わえるように、試行錯誤を続けていきます。

**もちつき** もちつきは、参加者にとって楽しみなイベントですが、スタッフの準備や後始末にかかる労力が重荷となっていました。内容を見直し、少し負担を軽減し、改善することができました。

**課題** 土づくり

### 【自然環境教育事業】

周辺環境が変化する中、地域の自然を体験、観察できる場としての役割を担い、その重要性は増えています。目的や方針の実現と検証を重ねながら、スタッフに過重な労力のかからない形を模索していく必要があります。

**生態園らしい催し** 天候不順のために中止した催しを除いて、計画どおり実施しました(資料p1-3)。講師の方々それぞれのお力により、参加者には楽しんでいただけたようです。体験催しは人気があり、草だんご作り、昆虫標本作り、たき火体験、のこぎり体験など定番のものを無事に行いました。

新しい企画として、「昆虫探偵団」を開催しました。全6回の連続もので、昆虫を探し、採集し、観察して放します。回を重ねるごとに、子どもたちはカブト虫やクワガタだけでなく、小さな昆虫にも関心が向き、観察眼が養われたようです。内容の充実を図りながら、次年度も行います。



昆虫探偵団

「めざせ！ザリガニマスター」 日曜の午後は満員御礼の連続でした。5～10月で計13117匹の

ザリガニを引き取りました。いただいたザリガニの粉末を田んぼ肥料にしたほか、動物園に提供しました。新たに山形大学の研究に提供する縁もでき、配送しています。ロコミによる参加者の拡大はとても有難い反面、スタッフの負担が大きくなってしまいました。負担軽減を図るため、引き取り方法等を検討しました。横浜市にも評価いただいた催しの持続可能な形を模索しながら、進化させていきます。

**教育機関の自然体験活動支援** 本年も、米作り、クラブ活動等、小学校の活動を支援しました。東京都市大学の研究室が本年から、園内の土壌水分の調査を続けています。植生環境保全の参考になることが期待されます。同研究室の学生さんたちには雑木林管理の一環で、低木伐採を体験していただきました。

また、つづきMYプラザ主催の「はあとdeボランティア」事業で、小学生と高校生のボランティア体験を受け入れました。カエル池の水を抜き、ザリガニ駆除作業をしていただきました。こうした若い方々の作業体験支援もまた、保全参加を広げる一つの入り口になりそうです。

## 【自然の普及啓発事業】

来園者に生態園の自然や生きものを知り、親しみを感じていただけるように、生物展示、パネル等展示、植物名札を折々に更新しました。小学校配布の季刊「生態園だより」、地域紙「タウンニュース」へ毎月の投稿も継続しています。

**パンフレット** 都筑区で活躍するデザイナーさんに依頼し、三折パンフレットを刷新しました。タイトルを「ちよっと一息、小さな自然」と題し、植物写真と生きもののイラストを使い、自然の豊かさや風景の印象が伝わるようにと作成しました。

**ホームページ** 1月にサポーターさんのお力をいただき、全面リニューアルしました。自然の様子、催しや活動、催し案内を、ふんだんな写真を使って魅力的に発信しています。未完成部分もあり、今夏に落着する予定です。



**アメリカザリガニ冊子** アメリカザリガニは、生態園の保全活動と催しにおいて、一つの重要なテーマとして定着しています。子どもたちに楽しく、かつ、現時点でわかる範囲のアメリカザリガニに関する正確な情報を伝えていこうと、作成中です。「めざせ！ザリガニマスター」カードのイラストを描いてくださった漫画家の方に依頼し、次年度はじめには完成の予定です。地域の小学校配布や観察会での活用など検討しています。

**植物ガイドブック** 既に3刊を発行している「ようこそ生態園へ」は、植物グループが手がけ、本年度は秋の花を中心に原稿作成と校正を検討し、次年度4刊目として発刊予定です。

**タケノコ、サンショウ、シイタケ** 地域の方々に自然の恵みを提供している公園として定着しています。特にタケノコは柔らかくて美味と、人気があります。



稲のはざかけ

## 【運営ほか】

**消費税** 本年度より課税事業者（簡易課税方式で届出済）となり、消費税の納税義務が開始となりました。会計業務全般には煩雑な作業も多くありますが、研修を受けるなどしながら業務にあたりました。

**来園者アンケート** 154通の回答をいただきました。「田んぼがあつてすてき」（9才以下）「おだやかな自然が保たれ、ほっとする。すれ違ふどなたとも自然にあいさつし合っている」（70代）「そのまま、ありのまま・・・すばらしい。キープ願う」(50代)等嬉しい感想のほか、「雑草が茂りすぎて薄気味悪い。蛇でも出てきそう。田ん

ぼより上の道に入れなかった」(70代)「緑が大変心地よいが、もう少し雑草刈ってあるとよい」(80代)という意見も聞かれました。(資料p10-12)



かいぼり

**他団体との連携など** 秋に、文化・自然体験施設11団体の連絡会が行われ、参加しました。横浜市の指定管理を単独指定で受け、体験施設の管理にあたる団体の集まりです。今後も次期指定管理(2021年度)に向けて大切な情報交換の場になると思われま

す。地域でパワフルに活動するおやじの会には、伐採木の薪作りや、子どもたちの体験活動での薪利用など、有効に使っていただきました。また、かいぼりやブルーギル駆除では、内水面試験場、東海大学、水辺スタッフ OB の方々が道具や労力と知恵も快く提供してくださいました。多くの方々の支援をいただいて事業を行うことができます。

**ごみの排出** 前述の第三者委員会による「事業評価」で、ごみの排出について改善の指摘を受けました。これまで地域の集積所に家庭ごみと同じに出してきましたが、指定管理者は事業系ごみの排出をしなければならない規定を見落としていました。3月に回収業者と契約し、改めましたが、今後、こうした間違いのないように注意していきます。

**詰所増築** 2004年に新築された詰所も、事業が活発に拡大するにつれて、手狭となり、不便が増えています。2017年に横浜市に要望を伝え、相談を続けています。安定した事業継続のために、話し合いを進めていきます。